

聖書: エステル記8章1～8節

説教: 自分の同族のために

はじめに

クセルクセス王の側近であったハマンは、モルデカイ自分に頭を下げなかったことを恨み、ペルシャ帝国に住むすべてのユダヤ人を根絶やしにしようとする王の名前で法令を發布しました。このことをモルデカイから聞かされたエステルは、ハマンの悪事を王に訴えようとするのですが、訴えるだけの決定的な証拠がなく、もう後はないというギリギリの所まで追い込まれてしまいます。そんなとき不思議なことが起こります。寝付かれなかった王が年代記を読んでいると、かつてモルデカイが王のいのちを救うという大手柄を立てていたのに、なにも栄誉を与えられていなかったことを見つけ、これにはハマンが一枚噛んでいると感づくのです。そんなことがあったとは知らせていなかったエステルは、決死の覚悟で「ハマンは悪人である」と訴えると、王は「やっぱりそうだったのか」とすぐに了解し、結局ハマンは自分がモルデカイをつるそうと思って立てさせた柱につるされてしまった。これが前回までのあらすじです。

これで一件落着くと思ったら、実はまだ大きな問題が残っていました。ハマンはさばかれて失脚しましたが、ハマンが出した法令は有効になったままなのです。この問題に対してエステルとモルデカイはどう行動していったのか、そこにどのような神の御手が働いていたのかを見て参ります。

## 1 モルデカイ

### 1) 王妃の親族なのに

1節。「その日、クセルクセス王は王妃エステルに、ユダヤ人を迫害する者ハマンの家を与えた。モルデカイは王の前に来た。エステルが自分と彼との関係を明かしたからである。」

エステルは、王を殺そうとする動きがあるとの情報を王に伝えたとき、これはユダヤ人モルデカイがもたしてくれた情報であるということは告げてはいたのですが、彼が自分を育ててくれた親戚であることは、モルデカイから口止めされていたので、伝えていませんでした。一般の常識からすればちょっと奇妙かもしれません。王妃の親戚であるモルデカイを王宮の高い地位に取り立ててもらおう、そういうことをアピールできる絶好のチャンスだったのです。けれどもなぜかモルデカイは一切そのようなことはさせません。

驚いたのはクセルクセス王でしょう。常々エステルの謙遜さには王も感銘を受けていましたが、モルデカイも王から栄誉を受ける権利があるのに、それが忘れられても要求しないどころか、王妃の親族であることさえも隠していた。そのことに強い印象を受けた王は、ハマンがいなくなって空席となった側近の席にモルデカイを座らせることにします。

### 2) 王の信頼を受ける

2節。「王はハマンから取り返した自分の指輪を外して、それをモルデカイに与え、エステルはモルデカイにハマンの家の管理を任せた。」

話しはハマンのことにさかのぼりますが、王が彼を自分の側近に取り立てようとしたとき、彼なら大丈夫だろうと判断したから王の指輪を与えたはずでした。ところがふたを開けてみたら、ハマンは王に反逆する者であったことが暴露されてしまいました。そんな不祥事が起きた後ですから、次の人物を選ぶとなれば王も相当慎重になるはずです。例えば銀行のようにお客の信用を大事にするような会社では社員を採用するとき、身元調査をされると言われています。当然ハマンも過去の行いについて調べられたでしょう。そうしたら不都合な事実が見つかってしまうのです。ハマンが側近に取り立てられたとき、王はハマンに膝をかがめてひれ伏すようにと命令を出した。ところがモルデカイだけが、頑として頭を下げない。それは、申命記25章19節に「アマレクの記憶を天の下から消し去らなければならない」とあって、ハマンがまさにこのアマレク人の子孫であったからでした。

しかしペルシャ帝国において、そんな理由は通用するはずはありません。モルデカイは王の命令に背くという重大な違反行為をしていたのですから、王の側近になる資格はない、となるはずです。ところが、王はその事実を知った上でモルデカイを側近に採用する。どうもクセルクセス王は、決まり事優先という人ではなかったようなのです。モルデカイはハマンに頭を下げずに王の命令に背くことになりましたが、後から振り返ればモルデカイの判断は間違っていなかった。王はモルデカイの謙遜さに加えて、人を見抜く力があると考えたということでしょう。しかしモルデカイにしてみれば、自分にもともとそんな力があつたわけなく、

ただ聖書のみことばに忠実に従ったら、たまたまこんな結果になった、ということでしょう。

## 2 エステル

### 1) 権威があるのに、ないかのように振る舞う

エステルのことばによってハマンの悪事が暴露され、育ての親であるモルデカイも王の側近に大抜擢されました。エステルの時代にニュース番組があったら、こんなことを言うかもしれない。「いまや王妃エステルの一族が王宮を支配するようになり、王でさえ彼らの力を無視するのは難しいだろう。」

そんなことを言われても不思議ではない環境がそろったのですから、エステルもかつてのワシュティのように王の前でもっと尊大に振る舞うこともできたはずですが、最初にも申したように、この時ハマンはさばかれましたが、ユダヤ人を根絶やしにせよとハマンが書いた法令はなお有効のままです。それがまだ解決されないまま残っているのです。こんな場合、普通はどうしますか。モルデカイは王から指輪をあずかっているのですから、別にエステルが頭を下げて泣いてお願いする必要はなくて、かつてハマンがしたように、王の指示を仰がずに、自分たちの判断で法令を出すことができるのです。ところがエステルは、まるで自分には何も権威も権力もないような姿をして、なおも頭を低くし、身を低し、自分は王に願ひ出る資格がない者であると言って、ひたすらにあわれみを乞い求めるのです。

5、6節。「もしも王様がよろしければ、また私が王様のご好意を受けることができ、このことを王様がもっともだと思ひになり、私のことがお気に召すなら、アガグ人ハメダタの子ハマンが、王のすべての州にいるユダヤ人を滅ぼしてしまえと書いた、あのたくらみの書簡を取り消すように、詔書を出してください。どうして私は、自分の民族に降りかかるわざわいを見て我慢していられるでしょう。また、どうして、私の同族が減びるのを見て我慢していられるでしょう。」

### 2) 自分の民族、私の同族

その内容についてですが、エステルがこのように語っていることに目を留めます。「どうして私は、自分の民族に降りかかるわざわいを見て我慢していられるでしょう。また、どうして、私の同族が減びるのを見て我慢していられるでしょう。」

これに似た表現、これまでもありました。2章10節。「エステルは自分の民族も、自分の生まれも明かさなかった。モルデカイが、明かしてはいけ

ない彼女に命じておいたからである。」同じく2章20節。「エステルは、モルデカイが彼女に命じていたように、自分の生まれも自分の民族も明かしていなかった。エステルはモルデカイに養育されていたときと同じように、彼の命令に従っていた。」

この箇所を含めて三回も繰り返されていますから、よほど大切なことでしょう。「民族」には「人々」「民」という意味があり、「同族」には「生まれ故郷」「親族」という意味があります。彼らは自分の血のつながった同じ家族である。だから彼らわざわいが降りかかっているときに黙って見ていることなどできません、彼らが殺されるのならば、私は死んだも同然となる、そのように訴えています。

しばしば私たちは、困っている人に対して何かをしたときに、「私はあの人を助けて上げた」と、自分は良いことをしたのだと思って心の中で何か優越感に浸ることがあります。誤解していただきたいのですが、エステルがしているのはそういうことではありません。ほかの人の苦しみは自分が苦しむのと何も変わりがない。彼らは他人ではない。私の家族、私の親戚、私の友人たち。彼らの苦しみは、私の苦しみ。そのようにとられているのです。

## 3 イエス・キリスト

### 1) エステルの姿から主が浮かび上がる

神が罪人を救おうとされる時、なぜ十字架という道を選ばれたのか。考えてみれば不思議なことです。そのような遠回りなことはせずに、「あなたがたの罪は赦されました」と宣言すれば、神が語ることばはそのとおりに実現していくのですから、それでよかったはずですが。

エステル記には神ということばは一度も出て来ません。けれども、イエス・キリストとエステルには、いくつかの共通点があつて、エステルの記音場と態度から、救い主の姿が浮かび上がるようになっていく。

たとえばこういうことです。主は天の右の座に座しておられて、地上ので人が罪を犯して滅びの道を歩んで苦しもうともそこにとどまってもまったく問題なかった。それと同じようにエステルも王宮の中にとどまって、何も手を出さないという選択もあり得たのです。ところがモルデカイから「あなたは王宮にいるから助かると思つてはならない」と言われたとき、これは他人のことではなく、自分のこととでもあるのだと悟り、彼らが救

われるために、王宮の中で絶大な権力を持っていたのに、王の前で身を低くし、死を覚悟しながらユダヤ人の救いを願い出ていきました。

2) すべてを捨ててなにも持たない者となられる主も同じ。私たちが罪によって滅びていくことは、この方にとって他人ごとではないのです。私たちが罪によって滅びることを、まるで自分のこととして悲しんでくださった。そのことをなんとか食い止めなければと願って、主はなりふりかまわず人となられ、本当はすべての権威と能力があったにも関わらず、まるで何も持たない者の姿となられて十字架でいのちを捨ててくださった。

ですから、一人の人が救われるとき、神の喜びはどれだけ大きいかということになる。ルカの福音書15章7節。「一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にあるのです。」

このように語ってくださる方の御名をあがめます。